

# 昭和史最大のミステリー「方おばさん」＝川島芳子 長春での生存説を科学的に裏付けた研究書

評者 ■ 藤原作弥 元日本銀行副総裁

昨年、中国東北地方を旅行した際、長春の歴史博物館（偽満皇宮博物館）を訪れた。これまで何度か見学したが、皇帝溥儀の寝室や宅、遊戯室のある同徳殿まで全館を公開していたので丹念に見て回った。

同徳殿2階の回廊から1階の大ホールを見下ろした時ある既視感にとらわれた。映画『ラストエンペラー』の中の、密会中の満映理事長・甘粕正彦と宮廷女官長・川島芳子が1階下の溥儀を皇后・婉容の様子をのぞき見るシーンを思い出したから（もつともこの場面は監督ベルトリッチの創作）である。

川島芳子と言えば、同博物館の売店で、『川島芳子生死の謎』（李剛・何景方著、吉林文史出版）が眼に入ったので早速購入した。その翻訳版が本書である。折から日本では「昭和23年、祖国反逆罪の罪名で死刑になったはずの川島芳子は実は替え玉で本人は昭和54年まで生きていた」という説が話題になっ

ていた。本書はそれを科学的に裏付ける歴史研究書だった。

私は山口淑子さんとの共著『季香蘭、私の半生』（新潮社）を取材・執筆する過程で、川島芳子のことは、かなり調べたつもりである。日本人でありながら中国人と出自を詐称して満映女優として国策に利用された山口淑子。清朝・肅親王の王女でありながら日本人・川島浪速の養女となり満洲国建設に協力した川島芳子。2人のヨシコは戦後、祖国反逆罪に問われるが1人は無罪、もう1人は死刑と明暗を異にした。

実は、川島芳子は、金の延べ棒10本で看守を買収し、北京刑務所を脱出、死の迫った病人の女囚がその身替りになって銃殺刑を受けたのが真相——と本書は明かし、芳子は、長春郊外に身をやつし長春と浙江省の国清寺という寺院の間を往復していた、と主張する。

生存説を立証したのは、義理の孫娘に相当する長春在住の女

流長春画家・張鈺さんで、「方おばさん」の遺品として数々の証拠品も所有している。

張鈺女士と面談した松本市の川島芳子記念館・館長、穂苺甲子男氏や山口淑子さんによれば同説の信憑性は「ファイフティ・ファイフティ」。

いずれにせよ川島芳子の生存には蔣介石や周恩来もかわっていたとの説もあり、このミステリー、まさに「事実は小説より奇なり」の面白さがある。

## 『川島芳子 生死の謎』

著者 ■ 李剛・何景方  
発行 ■ フイツーソリューション  
定価 ■ 3,150円

